新人保育者の保育の気づきからの一考察

岡　田　　恵

松山東雲短期大学

A consideration from the awareness of childcare by new childcare workers

Megumi OKADA

Matsuyama Shinonome Junior College
Kuwabara, Matsuyama
(Received Jan. 20, 2023)

Summary

In this study, we will clarify how the consciousness of new teachers as a childcare worker change from the process of creating documentation created in kindergarten. The purpose of this study is to conduct a case study of the process by which new childcare workers visualize childcare activities, to understand the activities of childcare itself, and to consider visualization methods that contribute to improving its quality.

1. はじめに

保育の質の維持，向上に向けた取り組みが求められている。この背景には，深刻な少子化問題が挙げられるが，保育の質がその後の子どもの発達のみならず，国の経済へのプラスの効果も期待されるエビデンスがある[1)]。また，子ども・子育て支援新制度（2015）においては，「子ども・子育てへの社会全体の支援が必要であり，保育の量のみならず質的な充実」が明記されている[2)]。さらに，文部科学省「幼児教育の実践の質向上に関する検討会」[3)]では，個々の教職員が子どもと直接関わりながら，幼児教育に関わる全ての者と連携・協力し，質の向上に一層取り組む必要について検討がなされ，厚生労働省「保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会」[4)]においては，保育所保育の特色を踏まえて留意すべき事項について議論がされるなど，国における保育の質に関する検討が急速に進められている。

厚労省の検討会「議論のとりまとめ」（図１）では，多角的な検討を通して，わが国の文化的・社会的背景を踏まえた「保育の質の基本的な考え方」が図１のように示されている。そこには,「保育の質は，子どもが得られる経験の豊かさと，それを支える保育の実践や人的・物的な環境など多層的で多彩な要素により成り立つ」。そして，「子どもにとってどうか」という視点が，保育の質を考える上での基盤と

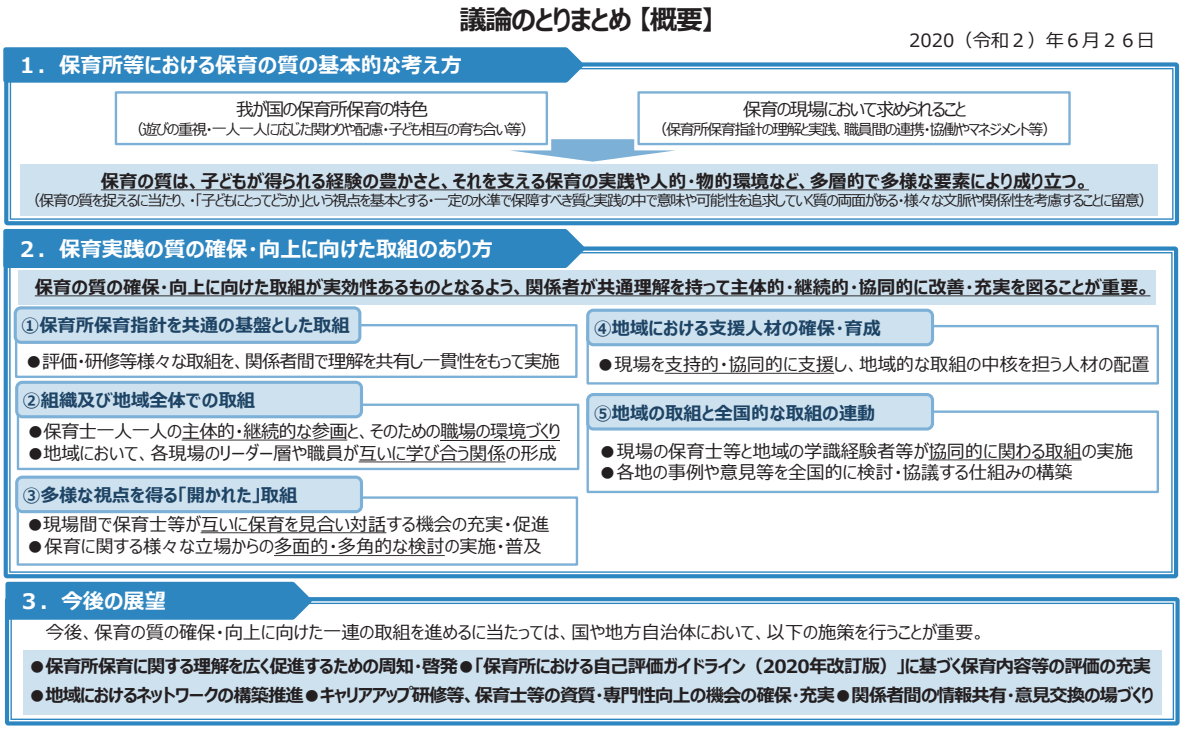

図１．保育所等における保育の質の確保・向上に関する討論会 議論のとりまとめ【概要】

なり,「遊びの重視」「一人一人に応じた関りや配慮」「子ども相互の育ち合い」など，わが国の保育の質の特色が明記されている。

これらのことから，保育の質を確保・向上させるためには，「取組のあり方」についても示されているように,「実効性」のあるものであることが大切であり,「関係者が共通理解を持って，主体的・組織的・協同的」に行われ「評価・研修等の様々な取組」を「関係機関で理解を共有し，一貫性を持って実施」する。つまり,「保育所保育指針」[5]を基盤とし，養護と教育が一体となった，子ども主体の保育の実践が求められている。

自己評価ガイドライン[6]では，保育者による日々の実践の「ふりかえり」が基盤となって，子どもの姿を記録，対話し，明日の保育の計画につながるサイクルが挙げられている。これは,保育者の主体的・継続的な行為を用いて，語り合う同僚性を育み，職場の風土形成とリーダー層のマネジメントが重視され，保育者同士が互いに保育を見合ったり語り合ったりする中での多様な視点を得られるための取組が必要になるということになる。

無藤・大豆生田（2019）は,「指導計画を作成する上で大切なことは，目の前の子どもの姿を捉え，そこから計画を作成していくことであり,『資質・能力』『５つの領域』『10の姿』などの要素を実際の子どもの姿に照らしてみることで，子どもたちに育っている力，これから育てていきたい力が見えてくる」[6]と述べている。その他，厚生労働省「保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会」保育所保育の特色を踏まえて留意すべき事項[4]においても「保育士等は，一人一人の子どもの理解や育ちの見通しに基づいて，様々な意図や配慮をもって

環境を構成し子どもに関わっているが，こうした過程やそこでの保育の目標・ねらいを，他者にも理解できるよう伝えるため言語化・可視化することが求められる。」と記載されている。

保育の過程や子どもの育ちの言語化・可視化については,現在の日本では「保育活動記録の見える化」「保育で行った事を記録」といった意味合いで用いられていることが多い。そのツールのひとつに「ドキュメンテーション」がある。保育ドキュメンテーションとは，もともとイタリアのレッジョ・エミリア市から発祥した教育思想のひとつで，子どもの活動を写真や動画，音声，文字などで視覚的に記録するというものである。

本学では，子どもの思考・探究活動を具体的に記録し，子ども自身が活動を振り返り次の活動へ生かすことを目的として，現場実習で学んできたエピソードを１年間かけて演習授業で読み込んでいる。学生の記録したエピソード記録を用いることで発達の違いやメカニズムを意識することができ，対象児の年齢や発達の理解がその後の実習にも連動している。また，自分の視点，保育者の視点の違いを明らかにしながら，学生自身の視点を保育者の視点に近づけていく（視野を広げる）ことをテーマに，複数の視点や見解がある事に気づくことができる。

これらのこと以外にも実習関連授業では，学生の学びを支える第１の支点である「学生の保育者に対する心情や意欲を大切にすること」に重点を置いている。実習上で注意しなければならない事項は，入念に指導するが，概して学生が保育者になる上で子どもが好きで，関わる仕事も好きでいられるよう配慮している。

本研究では，卒業後の座談会での対話をもとにどのように子ども理解を深めようとしているのか，また，実践を語るためのツールとして作成するドキュメンテーションを用いることで，新人保育者の意識がどのように変容していくのかについて明らかにし，考察することを目的とする。

２．研究対象

20XX年度　保育科を卒業した７名

３．研究方法

１）20XX年９月初旬：新人保育者がグループで対話を行う。また保育の様子の観察も可能であれば行う。(コロナ感染症対策のため,観察が出来な場合は,ビデオ撮影などの許可を得て実施する)

２）20XX年11月下旬：実際に作成したドキュメンテーションを持ち寄り，新人保育者がそれぞれの保育実践について対話を行う。

４．データ分析の方法

録音された内容を逐語録化したものをデータとし，大谷（2021）が開発したＳＣＡＴ（Steps for Coding and Theorization）[7]を用いて分析した。

分析手順

（1）データ入力･･･研究協力者の対話より「子どもの理解」「発達」に関する発話を入力する。

（2）グループ化・・・「子どもの理解」「発達」を分類し，注目すべき発話を書き出す。

（3）言い換え・・・注目した記述を踏まえて，他の語句へ言い換える。

（4）概念化・・・言い換えた語句から潜在的なテーマを概念化する。

（5）ストーリーライン・・・すべてのデータを組み入れた概念化の全体像を文章化する。

（6）理論記述・・・ストーリーラインから重要な部分を抜き出して理論記述を行う。

５．倫理的配慮

研究対象となる施設，及び管轄する管理責任者からは承諾済みである。

研究対象者には，研究への参加意思を文書で確認し，参加への意思確認を行う。その際，研究からの逸脱の自由と逸脱によって不利益を被らないこと，データ利用に関する約束事項を文書で説明する。

個人情報については，すべて匿名化し，個人が特定できない状態で保存管理する。

得られた調査データは，研究発表後破棄する。紙媒体は細断し，電子データに関してはデータ復元不可能な処理をして破棄する。

６．結果

第１回目　20XX年９月初旬

２つのエピソード（１．２歳児の姿）をもとに，大学内において新人保育者７名が対話を行う。

新人保育者７名は，エピソードをもとに現在の自分自身の担任クラス，子どもたちの遊びについて保育実践などを交えながら，対話を行った。具体的には，「１人の対応をしていると，違う子がまた別の子をひっかいたりする」「子どもの年齢に応じて今何ができて，できないのかがわからない」「１人で３人を見るなんて私たちには難しい」など，子どもの発達理解はしていても，保育者としての経験が浅いため，子どもの行動に不安や悩みを抱えている様子が語られていることから，一人で複数の子どもを見ていることが多いから，ちょっと目を離した隙にトラブルになることが多い。自分がやっていることがあっているのか間違っているのかわからない。同じ２歳でも育ちは色々で発達も個々に違うという発話については，子どものことがよくわからない，適切な子どもの対応ができればいのではないか，と言い換えられ，これらを最適な子どもの理解の知識が得られていないと概念化した。

これらの結果から，研究参加者は，子どもの理解に対する知識が得られておらず，特に２歳児の発達や様々な場に応じた対応力が難しいゆえに，自信が

エピソード１．２歳児６名担当

エピソード１

保育所では毎日連絡帳を書いて保護者とやりとりをしているのだけど，その返事に「昨日の遊びが本当に楽しかったようです。ありがとうございます」などお礼を言ってもらえることがあると，とても嬉しい。自分の保育がわからないながらも，子どもたちの様子を連絡帳に書くことで，子どもの様子を保護者に理解してもらえたり，自分の保育の様子を知ってもらえたりすることが共有できるようなことが，保育の楽しさかなと思っている。ちょっとしたことだとは思うけど，子どもが「できたこと」「うれしかったこと」などを一緒に喜べることは自分にとっても自信につながっている。時にはつらいこともあるけれど，うれしいことがあれば、また頑張ることができる。

また，春はすごく人見知りで，私のところには全然来てくれなくて，私の顔を見ただけで泣いていることも多かった。担任としてはりきっていたけれど、泣かれると、自分のことを信頼してもらえてないと思うと自信がなかった。でも，夏になる頃には私がいないと泣いて探すようになって，私が担任だとわかっているのかなと思うと，子どもは本当にかわいいし，愛おしい。自分がしっかりしないといけないとか，自分の判断で子どもたちが落ち着かないとか考えるようになってきたのは、少し責任を感じるようになったからだと思うようになった。

エピソード２.

エピソード２

保育所の生活にも慣れてきたようで，少しずつ自分の興味のあるところへ歩けるようになって，お部屋の中だけではなく別の部屋にも行きたくなってきたようで，少しの段さも怖がらずに越えていくようになった。自分の担当の子ども達６人と，お部屋を出て園庭で遊ぶとなると，ちょっと目を離した隙に一人が違う場所に離れて行ったりして，止めようとして追いかけている間に，違う子どもは，遊具の取り合いになって引っかいたり，叩いたりしてしまったりすることが増えてきた。これも子どもたちにとっては，他者を意識するようになってきたからこその行動だと思うけど，どう自分が動けばいいかわからない。とても大変。けがをしないように見ようとすると，子どもたちがすることに禁止ばかりして，あれもダメ，これもダメというように，自由に遊ぶことも止めてしまっている。

これまでは，子どもも自分も緊張していたこともあって，保育者の側にいて離れることもなかったけど，それぞれが興味のあるところに離れて行ってしまう。叱るわけにもいかないので，手を出しやすい子を自分の隣に連れてきて「ここにおってね」と確保しておくようにしている。この毎日のちょっとしたことで悩んだり，自分の保育が間違ったりしているのではないかとか不安になる。他の先生はどうしてるのかな？みんな（同期）はちゃんと保育をしているのかな？あたりまえだけど，自分がしっかりしなければいけないことはわかるけど，補助をしてくれる人はいないし，私の経験がないからどうすればいいかわからない。

持てていないことが推察された。引き続き「子ども理解」「発達」を意識した保育の事例を継続して記録して対話をすることの必要性や，自分たちの保育者としての成長には，他者と保育実践を語ることが必要であることの気づきがあることが考察された。

第２回目20XX年12月下旬

新人保育者の作成したドキュメンテーションをもとに対話を行った。

第２回目では，作成したドキュメンテーションを見ながら「指の使い方がわかりやすい」「この遊びが子どもの発達の何歳くらいか理解するのは難しい」「発達に応じた個々の育ちを自分たちはどのような援助をすればいいのか」など，養成校で学んだことを基礎にしながら日々の保育を振り返り，対話を行なっていた。これらは，子どもの遊びの様子はわかるが，この遊びが発達過程のどのあたりを示しているのかまだまだ理解が難しい。説明ができないという発話については，子どもの発達過程がわからない，年齢に応じた発達の理解をしなければいけない，保護者の方にわかるように説明するには，発達の見通しが理解できていないと難しい，と言い換えられ，これらを最適な子どもの発達過程の知識が得られていない，年齢に応じた援助，保護者への説明などの知識が得られてないと概念化した。

このことから，新人保育者は，子どもの発達過程に対する知識が得られておらず，特に年齢に応じた援助や保護者への説明などの対応力が難しく，それゆえに，自分の保育への自信が持てないことが推察された。

新人保育者は，試行錯誤をしながらも子ども達とかかわり，保護者からのコメントなどから自身の保育に成長を実感することができている様子もみられた。このように記録を基にドキュメンテーションを作成し可視化することで，自身の保育に成長を実感

表１．ＳＣＡＴを活用した方法による分析過程

(1)データ入力	(2)グループ化	(3)言い換え	(4)概念化
子どもの性格がわかってくると，個別に関わらないといけない場面がわかるようになってくる	子どもの性格	・子どものことがよくわからない ・適切な子どもの対応ができればいのではないか ・その場に応じた対応の仕方を知りたい	・子どもの理解の知識が得られていない ・適切な対応が難しい ・その場に応じた対応が難しい
１人の対応をしていると，違う子がまた別の子をひっかいたりする			
子どもの年齢に応じて今何ができて，できないのかがわからない	子どもの発達		
１人で3人を見るなんて私たちには難しい			
2歳児の発達についてそれぞれ個の違いが大きい			
おしゃべりができないから，コミュニケーションがとれない			
ベテランの先生がやっている対応を真似するといい	対応方法を知りたい		
自分がやっている対応があっているのかわからないし自信がない			

(5)ストーリーライン	一人で複数の子どもを見てることが多いから，ちょっと目を離した隙にトラブルになることが多い。自分がやっていることがあっているのか間違っているのかわからない。同じ2歳でも育ちは色々で発達も個々に違うという発話については，子どものことがよくわからない，適切な子どもの対応ができればいのではないか，と言い換えられ，これらを最適な子どもの理解の知識が得られていないと概念化した。
(6)理論記述	研究参加者は，子どもの理解に対する知識が得られていない。特に2歳児の発達や様々な場に応じた対応力が難しい。それゆえに，自信が持てていない。

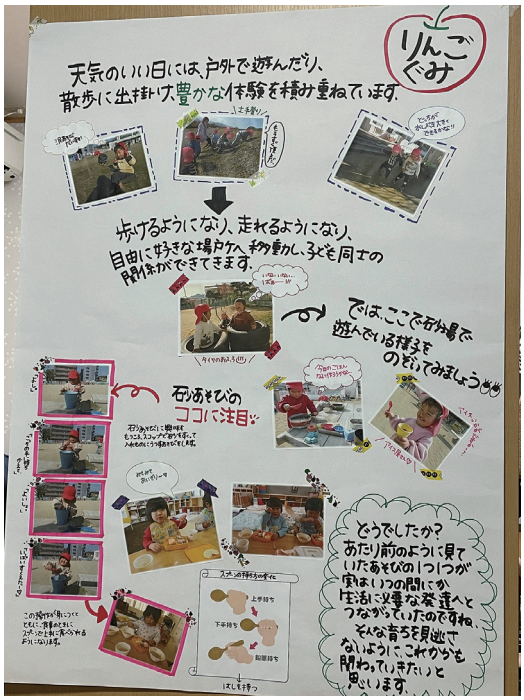

図２．ドキュメンテーション１
　砂遊びをしている子どもの具体的な遊びの様子から，スコップで砂をすくっている１場面

図３．ドキュメンテーション２

できることが，新人保育者にとっては，子どもを見る目の変容を知るきっかけとなり，さらには，可視化することで，子どもの成長の様子を通して家庭への支援につながることの大切さの気づきが語られていた。

表２．ＳＣＡＴを活用した方法による分析過程

(1)データ入力	(2)グループ化	(3)言い換え	(4)概念化
砂遊びの様子で指の使い方がわかりやすい	子どもの発達	・子どもの発達の理解 ・年齢に応じた発達の理解をしなければいけない ・保護者の方にわかるように説明するには，発達の見通しが理解できていないと難しい	・子どもの発達に対する知識が得られた ・保護者への説明が必要 ・年齢に応じた援助が必要
この遊びが子どもの発達の何歳くらいか理解するのは難しい			
この様子から自分たちがどのような援助をすればいいのか	子どもの理解や援助		
この遊びがどのような発展していくのか説明ができない			
保護者の方はこれを見てどのように感じるのか			
どの写真を使えばいいか悩む			
連絡帳に書く内容が具体的になった	保育者の成長	・自身の成長	保育のおもしろさ

(5)ストーリーライン	写真を用いることで，子どもの遊びの様子はわかるが，この遊びが発達過程のどのあたりを示しているのかまだまだ理解が難しいし，説明ができないという発話については，子どもの発達過程がわからない，年齢に応じた発達の理解をしなければいけない，保護者の方にわかるように説明するには、発達の見通しが理解できていないと難しい，と言い換えられ，これらを最適な子どもの発達過程の知識が得られていない，年齢に応じた援助，保護者への説明などの知識が得られていないと概念化した。
(6)理論記述	研究参加者は，子どもの発達過程に対する知識が得られていない。特に年齢に応じた援助や保護者への説明などの対応力が難しい。それゆえに，自信が持てていない。

７．考察

第１回目の対話では，子どもの発達理解はしていても，保育者としての経験が浅いため，子どもの行動に不安や悩みを抱えている様子が語られていたが，第２回目では，試行錯誤をしながらも日々の保育を実践し，記録を基にドキュメンテーションを作成し可視化することで保育者としての気づきが語られるようになり，子ども理解を深めながら自身の保育に成長を実感していた。したがって，新人保育者は，実際の保育の場において日々の保育を客観的に記録し，その中で心に留まった言動について「なぜ」「どうして」など，一人一人の子どもについて多面的に捉えるこれらのことが，新人保育者にとって喜びとなり，保育の面白さにつながっていることが考察された。

岡田(2018)「初任保育者の不安とやりがいの変容」では，新人保育者は，いざ働きはじめると子どもとどのように接してよいかわからなくなり，自身の対応はこれでいいのかなど不安になることがある。養成校での保育実習の経験や学びを基に，「子ども理解」「発達」の重要性など，様々な解釈を考え，子どもたちに対応をしているが，ペアを組む担任や先輩保育者から話を聞くことに気を使ってしまうなど自分の保育について自信が持てず，結果として，不安や悩みを抱えてしまっているという問題を指摘している[8)]。また，新人保育者の不安や悩みとしては専門的な力量の形成よりも，管理職や先輩保育者との関係の構築，職場への適応という面で悩みであることが示されており，一方，よろこびややりがいは，他者の評価から得られていることが示されている。そのため，養成校の段階において，自己肯定感と他者肯定感を共に育んでいけるような体系的なカリキュラムと授業が必要であり，自分たちが様々な方向から見た子どもの姿や，かかわった子どもの思いを次の保育に生かし保育を育てることの出来る，また集団の中でも個々のことを考えることの出来る保育者養成を行わなければならない。

本学では，現場実習において作成される「実習記録」に子ども理解を深めるために保育者のかかわりや子どもの状況などについての読み取りに焦点を当て，記録としてのドキュメンテーション作成を取り入れている。これらを教育的意図と成果，評価の発信へと導くことが，これからの保育の発展に寄与する大きな一歩であると考える。更に保育の安全・安心及び地域のこども環境の充実を考えたときに保育ドキュメンテーションによる記録の成果は大きいと考える。

８．今後の課題

本学では,卒業後に開催している「保育実践講座」での事例検討会や，日頃の保育課題を解決するために座談会を開催するなどのフォローを行っている。保育者としての研修会は多く開催されているが，自分自身の保育のあり方を気軽に話せる機会がないこともあり，当初は本学の卒業生が主体的に集まり開催していた座談会であった。しかし，職場に持ち帰り座談会での話をすることで，勤務先の他の職員からも参加希望があり，定期的に開催するようになった。この実践者の集まりを本学では「木曜研究会・実践講座」と呼ばれ，おおよそ38年間誰でも参加できる現在も継続している会となっている。大学の教員と現場の保育者とで構成される木曜研究会は，保育者養成校にとって重要な役割を果たされ，養成校と保育現場との信頼関係構築の場になっている。実習担当者はほとんど毎回出席し，現場の保育者との関係を築き，さまざまな実践事例や実習での意見交流を行うことで本学の実習指導の内容についても共通理解のもとで実施することができる機会となっている。この研究会において，ドキュメンテーションを用いて保育者と子どもとの，また，保育者と保護者との，さらには保育者同士同僚との対話のツールとして子ども理解を深めることは重要であると考える。しかし,子どもたちの理解を深め,保育者自身が,自分自身を振り返るツールとして用いることにおいては，とても専門的なことであり難しいことでもある。保育の質向上において可視化は保育者や保護者の共通理解のために必要な方法だと考えるが，日々の保育業務の中で，記録やドキュメンテーションを作成するのは大変な作業であり，時間の確保や同僚や先輩保育者と対話をする機会をどのように行うかについて，今後の検討が必要である。

参考文献

１）無藤 隆・内田 千春「幼児教育のエビデンスと政策」2016年２月25日発行（Ver. 1.0）

２）内閣府「よくわかる「子ども・子育て支援新制度」2015年４月施行

３）文部科学省「幼児教育の実践の質向上に関する検討会」2020年５月26日

４）保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会　2020年６月26日

５）厚生労働省（2020）保育所における自己評価ガイドライン

６）無藤隆・大豆生田啓友 編（2019）『３・４・５歳児子どもの姿ベースの指導計画』フレーベル館

７）大谷（2021）ＳＣＡＴ（Steps for Coding and Theorization）

８）岡田　恵（2018）第24回保育保健学会「就学前施設に勤務する初任保育者の不安とやりがいの変容」日本保育保健学会第24回大会プログラム pp.66

付記

本研究は，2021年度　中・四国保育士養成協議会より助成金を受けたものである。なお，本稿はその一部を2022年度　中四国保育士養成協議会研究報告書において発表したものを再構成し，加筆修正している。